

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780395

研究課題名（和文）児童期における言語的な表示規則の発達過程の解明

研究課題名（英文）Developmental changes of verbal display rules in childhood

研究代表者

田村 綾菜（TAMURA, Ayana）

京都大学・こころの未来研究センター・研究員

研究者番号：70617258

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：表示規則とは、どのような場面でどのように情動を表出すべきかといった情動表出に関するルールのことである。本研究では、言語表出の調整という側面に着目し、多様な場面を含む言語的な表示規則の発達過程を検討することを目的とした。定型発達および自閉症スペクトラム障害（ASD）のある児童を対象に課題を実施し、児童期において年齢が上がるにつれて内心と発言の一致率が低くなること、ASDのある児童も言語表出をより適切に調整していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Display rules are rules concerning emotion expression such as in what scene and how to express emotion. In this research, focused on aspects of language expression regulation, and aimed to examine the developmental process of verbal display rules in various scenes. Tasks were conducted for typically developing children and children with autism spectrum disorder (ASD). The result shows that the concordance rate between inner emotion and statements decreased with age in childhood, and children with ASD also express statements by appropriately adjusting it.

研究分野：発達心理学

キーワード：表示規則 言語表出 発達障害 P-Fスタディ

フラストレーションの原因が自己にあるかどうかや、発言相手が大人か子どもかといった要因によって言語的な表示規則の使用頻度に違いはみられなかった。言語的な表示規則の使用には、発言相手やフラストレーションの原因以外の要因が影響している可能性が示唆された。

(2) TD 児の回答について、フラストレーション場面での程度一般的な反応をみるための指標である GCR (Group Conformity Rating) (%) の平均値を条件ごとに算出したところ、発言条件で 52.5 ± 15.4 、内心条件で 30.8 ± 13.8 で、発言条件の方が有意に高かった ($t(18) = 7.51, p < .001$)。このことから、TD 児はフラストレーション場面において内心をそのまま表出するのではなく、言語表出をより適切に調整していることが示唆された。また、発言条件と内心条件の反応が不一致だったものを言語的な表示規則を使用したとみなし、不一致率と年齢との関連を検討した結果、年齢が上がるにつれて内心と発言の一致率が低くなることが明らかになった ($r = -.52, p = .02$)。このことから、児童期において、多様な場面における言語的な表示規則の使用が多くなることが示唆された。

(3) ASD 児の回答についても同様に GCR (%) の平均値を条件ごとに算出したところ、発言条件で 49.8 ± 15.4 、内心条件で 24.8 ± 10.4 で、発言条件の方が有意に高かった ($t(11) = 5.27, p < .001$)。このことから、ASD 児はフラストレーション場面において内心をそのまま表出するのではなく、言語表出をより適切に調整していることが示唆された。また、表示規則を使用した場面における反応をみると、内心で言い訳をしながら素直に謝罪する反応や、内心では不満に思いながらも相手を許容する発言などがみられた。これは成人や TD 児を対象とした結果と同様の反応パターンであり、非言語的な表示規則と直接比較した結果ではないものの、ASD 児は言語的な表示規則の方がより学習しやすい可能性があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① Tsunemi, K., Tamura, A., Ogawa, S., Isomura, T., Ito, H., Ida, M. & Masataka, N., Intensive exposure to narrative in story books as a possibly effective treatment of social perspective-taking in schoolchildren with autism., *Frontiers in Psychology*, 査読有, 5:2, 2014, 1-8

doi: 10.3389/fpsyg.2014.00002

② 田村綾菜, 言語的な表示規則に関する予

備的検討, *学苑*, 査読有, 869 巻, 2014, 83-88
③ 田村綾菜, 中学生の謝罪の抑制要因に関する探索的検討, *昭和女子大学生活機構研究科紀要*, 査読有, 23 巻, 2014, 129-137

[学会発表] (計 14 件)

① 田村綾菜・小川詩乃・吉川左紀子・正海信男, 自閉症スペクトラム障害のある児童のフラストレーション場面における言語的な表示規則の使用—P-F スタディを用いた検討—, 日本発達心理学会第 28 回大会, ポスター発表, 2017 年 3 月 26 日, 広島国際会議場(広島県・広島市)

② Tamura, A., Satonaka, A., Hasegawa, S., Hosokawa, M., & Suzuki, N., Effect of daily physical training on aerobic fitness and ratings of perceived exertion in teenagers and young adults with intellectual disabilities., Poster presented at 31st International Congress of Psychology (ICP 2016), 2016 年 7 月 27 日, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

③ 田村綾菜, 発達障害のある児童への学習支援の実践を振り返って, 一般社団法人 日本 LD 学会第 24 回大会, 自主シンポジウム (発達障害の「一面的な捉え方」から「多面的な特性把握」へ—MSPA (発達障害用の要支援度評価スケール) の活用を目指して—) 話題提供, 2015 年 10 月 11 日, 福岡国際会議場 (福岡県・福岡市)

④ 田村綾菜, 言語的な表示規則を用いる場面の探索的検討—P-D スタディの図版を用いて—, 日本心理学会第 79 回大会, ポスター発表, 2015 年 9 月 24 日, 名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)

⑤ 田村綾菜, 自閉症スペクトラム障害のある児童の言語的な表示規則の使用に関する探索的検討—P-D スタディの図版を用いて—, 日本教育心理学会第 57 回総会, ポスター発表, 2015 年 8 月 26 日, 朱鷺メッセ:新潟コンベンションセンター (新潟県・新潟市)

⑥ Tamura, A., Tsunemi, K., Ogawa, S., Yoshikawa, S., & Masataka, N., Referential communication of children with autism spectrum disorder. Poster presented at the 17th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences (JLSL2015), 2015 年 7 月 18 日, 別府コンベンションセンター B-CON PLAZA (大分県・別府市)

⑦ 田村綾菜・常深浩平, 自閉症スペクトラム児の発話と視点取得能力—図形伝達課題を用いた検討—, 日本発達心理学会第 26 回大会, ポスター発表, 2015 年 3 月 20 日, 東京大学 (東京都・文京区)

⑧ 田村綾菜, 「聞く」「話す」について, 日本教育心理学会第 56 回総会, 自主シンポジウム (児童の学習を支える力の育成・支援) 企画・話題提供, 2014 年 11 月 8 日, 神戸国際会議場 (兵庫県・神戸市)

- ⑨ 田村綾菜・伊藤祐康・小川詩乃・吉川左紀子, 京都大学こころの未来研究センターにおける「発達障害の学習支援・コミュニケーション支援」プロジェクトの取り組み, 第 55 回日本児童青年精神医学会総会, ポスター発表, 2014 年 10 月 12 日, アクトシティ浜松(静岡県・浜松市)
- ⑩ 田村綾菜・三浦香苗, 中学生の謝罪の抑制要因に関する探索的検討 (2), 日本発達心理学会第 25 回大会, ポスター発表, 2014 年 3 月 23 日, 京都大学 (京都府・京都市)
- ⑪ Tamura, A. & Tsunemi, K.. Reading fiction and perspective-taking ability in elementary school children, Oral presented at the 16th European Conference on Developmental Psychology, 2013 年 9 月 4 日, Lausanne (Switzerland)
- ⑫ 田村綾菜・三浦香苗, 中学生の謝罪の抑制要因に関する探索的検討, 日本教育心理学会第 55 回総会, ポスター発表, 2013 年 8 月 19 日, 法政大学 (東京都・千代田区)
- ⑬ 常深浩平・田村綾菜, 発達障害児における視点取得トレーニングの長期的影響, 日本教育心理学会第 55 回総会, ポスター発表, 2013 年 8 月 17 日, 法政大学 (東京都・千代田区)
- ⑭ Tamura, A., Tsunemi, K., & Kusumi, T., Children's understanding of nonliteral language: Irony, white lie and modesty, Poster presented at 2013 SRCD Biennial Meeting, 2013 年 4 月 20 日, Seattle (USA)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 綾菜 (TAMURA, Ayana)
京都大学こころの未来研究センター・
研究員
研究者番号：70617258